県知事表彰をいただきました

堀江　好一

去る平成25年11月14日埼玉県民の日、県知事表彰を拝受いたしました。技師会運営を長くお手伝いしたことが、「長年にわたり保健衛生の改善向上に貢献した」という基準に該当するのだそうです。本会推薦での受賞なので、現役の理事としては手前味噌で非常に恐縮しております。

私は1983年に免許を取得し31年間、診療放射線技師として働いてきました。35歳の時に理事として本会の運営に関わり17年間が経ちました。あらためて考えてみても、31分の17は大きいなと感じますが、私の技師としての人格形成への影響度はそれとは比較にならないくらいさらに大きいと感じます。いろいろ大変なことも多かったけれど、役員をやっているからこそ体験できるようなことも沢山ありましたし、何よりもすばらしい人との出会いが私自身の財産となっています。職場内でこれだけの刺激を受けるのは絶対に不可能だと確信します。私から本会歴代の役員の皆さまに感謝状を贈呈させていただきます。

17年前の最年少理事は、今年は最年長の理事になりそうですが、もう少しお手伝いさせていただきますので今後ともよろしくお願いいたします。

上田知事が表彰状を手渡してくれるわけではないので、コバトンにお願いしました。（笑）

表彰状

堀江好一様

感謝状

埼放技歴代役員様

あなたは埼放技役員として良くも悪くも私に影響を与え私の人格形成に寄与されたところ大であります
よってここに感謝の意を表します

堀江好一

受彰に際して

さいたま市立病院
林　伸幸

この度、公益社団法人埼玉県診療放射線技師会の推薦をいただき、公衆衛生事業功労者として埼玉県知事表彰を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。

思えば、学生時代に漠然と抱いていた「放射線の影響は蓄積する・回復する」という矛盾に思えた疑問を足がかりに、諸先輩方のご指導を仰ぎながら線量測定を中心に活動してきました。

活動の傍ら、15年ほど前になりますが、放送大学に入学して主に心理学・教育学を学びました。在学中、興味本位で受講した分子生物学に夢中になった時期があり、同じ頃に放射線管理士講習を受講して、放射線健康影響に関する理解が深まったことを思い出します。市民からの放射線検査に関する相談にお答えしながら、さらなる研鑽の必要性を感じつつ現在に至っております。

また、全国循環器撮影研究会の指針に沿い、血管造影の患者さんの推定最大皮膚線量を記録し始めて13年ほどとなりました。記録を始めた当時は、まだ被ばく低減が今ほど言われていない時期で、放射線防護連絡協議会主催の講演会やシンポジウムに何度も足を運び、また循環器被ばく低減セミナーに参加するなどして放射線皮膚障害の防止を真剣に考え、対策に苦慮していました。

この様に、興味に任せて自分に出来ることを行ってきただけですので、今回の受彰は身に余る光栄と恐縮しております。皆様のご期待に応えられますよう、今まで以上に研鑽していく所存です。

最後になりましたが、今回の受彰に際しご尽力いただいた方々をはじめ技師会の皆さまに、この場をお借りして、謹んでお礼申し上げます。

日本公衆衛生協会会長表彰を受賞させていただいて

東松山市立市民病院
工藤　安幸

この度は、小川　清　会長のご推薦と、執行部役員の方々、そして表彰委員の皆様の多大なるご推薦をいただいて、身に余るとても名誉な賞を受賞することができ、心から深く感謝いたしております。

去る3月20日（木)、東京大手町のサンケイプラザホールで行われた、平成25年度公衆衛生事業功労者の表彰式において、岡田　義和　氏とともに、日本公衆衛生協会会長表彰の授与を受けて参りました。

功績概要は「永年にわたり、診療放射線業務を通じて地域住民の健康維持に尽力している。また、全国各地で講師を務めることにより、地域住民の検診を担当する検診従事者の知識向上に貢献した」ということでした。

私は防衛医科大学校病院で約6年間お世話になった後、東松山市立市民病院に移って26年余り、地域医療の一翼の一員として勤めて参りました。

思えば、昭和59年に行われた長野県松本市の学会で、自治医科大学病院の伊勢　孝雄　先生と菊地　透　先生の「実効線量まで算出した発表」を拝聴して以来、私は「被曝線量」に深く関心を持つようになりました。日本消化管画像研究会では、消化管検査の被曝線量管理を担当し、鈴鹿でのセミナーや10の都府県で講師を担当いたしました。

また、県下の医療画像展における「医療被ばく相談コーナー」とともに、ホームページを通じた「医療被ばく相談の回答」を担当させていただき、多くの地域住民の方々が抱える「過度の不安」を「正しい理解と安心」に導くことができたと考えています。

福島第一原子力発電所の事故以来、今なお多くの方々が「放射線」にとても敏感な状況となっています。今後も多くの県民に対して「放射線」を正しく理解していただくという社会貢献に努めていきたいと考えています。また病院内では、検査を受ける方の目線で、少しでもより良い検査となるように、診療放射線技師の職務に精励していきたいと思っています。

この度いただいた表彰名にある「公衆衛生」の4文字を、この先ひと時も忘れることなく常に頭の隅において、功労者という名誉に恥じないよう精進していきたいと思っております。

会員の皆様、誠にどうもありがとうございました。

一般財団法人日本公衆衛生協会会長表彰を受賞して

公益財団法人埼玉県健康づくり事業団
岡田　義和

この度、公益社団法人埼玉県診療放射線技師会の推薦により、平成25年度公衆衛生事業功労者として一般財団法人日本公衆衛生協会会長表彰を受賞させていただきましたこと、此処において小川会長をはじめ公益社団法人埼玉県診療放射線技師会諸氏に感謝を申し上げます。

これまでの診療放射線技師としての30年に及ぶ年月は、今から思えばあっという間に過ぎてしまいましたが、これまでに経験したことは非常に密度の濃いものであったと思います。その中で、日本診療放射線技師会による科目等履修生第一期生として鈴鹿医療科学大学での単位修得を終え、学位認定機構への課題提出と試験により保健衛生学士を取得できたこと。また、公益社団法人埼玉県診療放射線技師会において委員と理事をやらせていただき、微力ながら事業活動に関わらせていただいたことにより、たくさんの方々との出会いがあり、そこからたくさんのことを学びました。そのことは、診療放射線技師として公衆衛生事業における責務を果たすため、日夜研鑽を積み重ねることに大いに役立ってきました。

診療放射線技師免許を取得して中規模の民間病院において6年間ほどの勤務経験をし、現在の公益財団法人埼玉県健康づくり事業団における24年間の勤務では、埼玉県内の住民や公的機関、民間企業における各種がん検診のX線検査により、がんの早期発見に努めてきました。がん検診の目的はがんによる死亡率を減少させることにあり「有効性が確立された検査を正しく行う」ということを認識し、受診率対策と的確な精度管理をしたがん検診を実施することであります。現在のがん検診の実施にはまだまだ課題がありますが、今回の受賞を新たな出発として、自身の知識と技術の更なる向上、学会や研究会での学術活動、社会における公衆衛生事業の活動を継続して行っていくことで、がんによる死亡率の減少に少しでも貢献できれば思います。

末筆になりましたが、公益社団法人埼玉県診療放射線技師会の益々のご発展を祈念申し上げます。

埼玉県公衆衛生事業功労賞受賞の喜び

特定医療法人同愛会　熊谷外科病院　放射線科
中野　寿夫

私は、昨年11月22日第57回埼玉県公衆衛生大会に於いて埼玉県公衆衛生功労賞を受賞させていただきました。

この賞は、公益社団法人埼玉県診療放射線技師会の小川会長をはじめとする役員、会員の皆様の推薦があったからこそ受賞することができました。

また以前、会の役員を務めるのにあたり、職場スタッフの協力がなければ務めることもできませんでした。

受賞後最初の報告は、私の勤務する放射線科スタッフでした。そのあと私の兄、亡き両親の仏前、家族、翌日勤務している施設の理事長、院長、関係部署、と報告しました。理事長はとても喜んでいました。関係する全ての方々の支援がなければ受賞することができませんでした。

今から37年前、高校2年生の時、私は、進学を希望していました。校内で旺文社の模擬試験があり、進学先に薬学部や理学部などを希望し、その他放射線関係のところがありそれらを選択しました。3年生となり担任から“薬学部なんぞ無理だ”放射線技師になったらどうかと言われ、放射線技師はどんな職業なのか思っていたところ、たまたま右手のけがをして深谷市内の医療機関を受診し、エックス線撮影を受け、その時の技師の方の温厚な人柄に感銘を受け診療放射線技師になろうと決心し、夜間の技師学校に入学しました。

その頃は、一般撮影はアナログで自動現像機がほとんどの施設で稼働し、タンク現像を行っていた施設も数施設ございました。CT装置は頭部専用装置がほとんどで、それも公的医療機関など限られた医療機関にしか設置されていませんでした。全身用CT装置は技師学校在学中に数施設で設置されてきたときでした。それでも1スライスを撮影するのに最短でも5秒くらいかかり、現在のCT装置の画像と比較すると雲泥の差がありました。

昼間、現在の施設で放射線技師の助手をしながら夜間の技師学校に通っていた関係上、3年生になると必至になって国家試験の勉強をしたのが今では懐かしく思えます。

昭和57年技師国家試験に合格した年にDSAやNMR（現在はMRI）の勉強会が初めて開催され、まだまだ先のことだと思いつつ、知識だけでも吸収しようと受講したのを覚えています。その頃は、一般撮影はもちろんのこと、胃透視撮影のテクニックを早く吸収し、CTや血管撮影装置などの操作を上手にこなせて、診断価値のある画像を提供するのが、良いとされていましたが、現在ではそれらにコスト意識やチーム医療、患者様にやさしい安全な医療を、と数えたらきりがありません。

現在の放射線画像診断装置は、MRIやCTをはじめ多岐にわたる画像処理が求められ、その処理方法や操作方法などを、若いスタッフに教えてもらうことが多くなりました。

私は、職場で放射線診療業務の他、施設医療安全を担当していますが、ひとりよがりでは何もできません。レポート提出、対策検討などを始め、自分の所属する部署はもちろんのこと、他の部署とのより良い関係を構築しておかないと協力など得られません。その基本となるのが人とのつながりです。人は、1人

でできることは限られますが、一致団結するとより強固なものとなります。それらのことは、職場や技師会関係に限らず、全てのことに言えます。昨年度、中学校PTA会長を務めさせていただき、今年度は地元の公民館役員に推薦され、多方面の方々との交流が多くなりました。自分の知識や経験を他の方々に伝えたり教えていただいたりしています。

2月1日には、第四支部が中心となり、盛大に祝賀会を開催していただきました。出席していただいた会員の親戚の方に埼玉交響楽団の団員がおられ、フルートの演奏を快く引き受けて下さり、心和む演奏は生涯忘れる事のできない良い思い出となりました。

企画していただいた実行委員会の皆様、ありがとうございました。

今後とも、この受賞を糧として更に業務に精励していきたいと思います。

受賞祝賀会　熊谷外科放射線科スタッフ

受賞祝賀会

受賞祝賀会

県民公開講座開催報告

平成26年2月23日（日)、大宮ソニックシティにて第29回埼玉県診療放射線技師学術大会が開催されました。併催して県民公開講座を行いましたので、ご報告させていただきます。

【講演名】「あなたのための健康診断」―画像診断を中心に―

講師：塚田　高志氏　アジュール竹芝総合健診センター

講師：宮澤　浩治氏　一般社団法人浦和医師会メディカルセンター

講師：吉沢　隆雄氏　獨協医科大学越谷病院　腎・予防医学センター

【日時】平成26年2月23日（日）

第1回　10：30～11：30

第2回　13：30～14：30

今回は、健康診断における画像診断の講演をメインに、超音波骨密度測定・放射線被ばく相談・医療画像展を行いました。

講師の先生方のお話は聞き手にとてもやさしく、また分かりやすい画像を使用し大変好評でした。質問を受ける時間も十分に取ることができ、来場していただいた皆様から“とても良かったです”“またお願いします”など、満足のお声を頂戴しました。パネル展示も熱心にご覧になられ、健康診断を受診する事の大切さや画像診断の必要性を十分に伝えられたのではと思います。

今回は冬季オリンピックの最終日、東京マラソンの開催日などと重なりましたが、自治体広報誌などへ案内を行った結果、38人の県民の皆様が来場してくださり、成功裏に終えることができました。

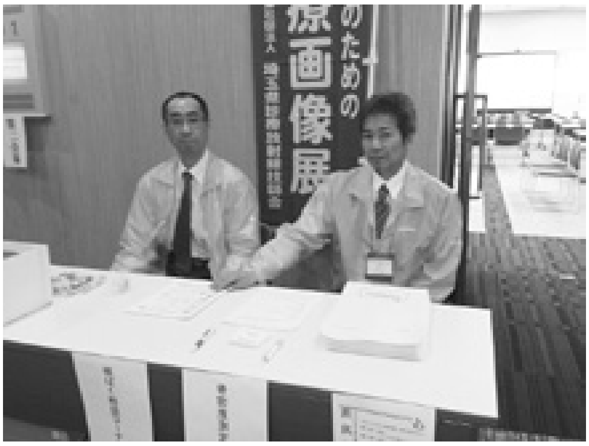
これからも会員の皆様のお力添えを得て、埼玉県診療放射線技師会は県民の皆様に満足していただける公益活動を提供していく所存です。より一層のご協力をお願い致します。

最後になりましたが、お忙しい中、講演を行っていただいた講師の先生方、準備段階からご助力いただいた学術大会実行委員と公益委員の皆様、そしてなにより学術大会に参加していただいた会員の皆様にこの場をお借りして心よりお礼申し上げます。

（講師：左より吉沢氏、宮澤氏、塚田氏）

（県民公開講座の様子）

（講演後に質問を受けている様子）



（公益委員会メンバーの皆様、お疲れ様でした）

日本医療科学大学へ訪問

埼玉県診療放射線技師会
総務常務理事　田中　宏

平成26年2月24日（月）、小川会長、結城常務理事、そして私の3名で埼玉県毛呂山町にある、日本医療科学大学に訪問させていただいた。訪問目的は、今年度の卒業生に対してのお祝いの言葉と、技師会の役割についてであり、1時間程度の説明をさせていただいた。当日は就職活動中の生徒もいたため、学生の出席者は53名であった。全員が真剣に聴講し、希望に満ちた表情が感じ取れた。

小川会長
診療放射線技師国家試験に私たちの職能団体である（公社）日本診療放射線技師会が深く関わっている。これも職能団体しかできない責務の一つである。
そして、技師会と学会の違いであるが、学会は専門分野ごとに分かれ、学問として興味のある分野へはぜひ加入していただき、専門性を高めていただきたい。それに対し技師会は、診療放射線技師が医療の分野で活動をする上で、知識・技術を基礎から応用へと体系的にカリキュラムが組まれていること、また若者向けの基礎的な講習会が企画されているなどが大きな違いでもある。
学生から社会人になり、実際に現場で勤務をすると、学校で習ったことだけではなく、幅広く、さらに深い知識が要求されるようになる。例えば、「チーム医療」「包括的な支持」などをキーワードとして、医師は医師しかできないことを行い、それ以外の業務は研修を受けた医療スタッフで医療をカバーしていく時代となった。これらの知識・技術を身に付けるために、ぜひとも技師会に参加していただき、皆で勉強していきたい。

結城常務理事
職能団体とは、法律や医療などの専門的資格を持つ専門職従事者らが、自己の専門性の維持・向上や、専門職としての待遇や利益を保持・改善するための組織であるとともに、研究発表会・講演会・親睦会の開催や、会報・広報誌などの発行を通して、会員同士の交流などの役目も果たす機関でもある。例えば、日本医師会・日本薬剤師会・日本弁護士連合会なども職能団体である。
技師会では各モダリティ別に生涯教育が行われており、自施設の技術・手法だけでなく、標準化された技術の習得や自分自身の技術の客観的評価も可能である。

田中
学生と社会人の違いであるが、学生は学費を払っているので、教えてもらって当たり前。しかし、社会人になると、4月から給料を支給されるので、「習っていません」「まだ、教えてもらっていません」という言い訳は患者に通用しない。自分自身が先輩や上司から学ぶという姿勢が大切である。
技師会の大きな役割の一つとして社会貢献がある。個々が社会貢献をしようと思っても限界があるが、人が集まり、組織を作ると大きな力が生まれる。2011年3月11日に発生した東日本大震災で、福島第一原発が事故を起こし、多くの住民が避難をした。そこで、避難民のサーベイを行ったのが日本放射線技師会（現日本診療放射線技師会）である。日本放射線技師会が全国の診療放射線技師に声をかけ、チームを組み一週間交代で福島に入り避難民のサーベイを行った。

日本診療放射線技師会、埼玉県診療放射線技師会は国民、県民のための事業を行っている。

第２回 Freed セミナー報告

学術委員会理事
佐々木　健

昨年に開催した第一回 Freed セミナーでは、20 年違う年代の架け橋になるために、10 年違うそれぞれの年代と共通の理解、認識を持つことを目的として「10 年後を見据えて今できること」を語り合った。

しかし、語り合う時間が充分ではなかったため、今年度も同テーマで開催することとした。まずは「医療界の今後」と題し、消費税増税の必要性と社会保障関係費にかかわる問題を日本と北欧を比べ、原因の一つでもある日本の人口減少問題に関して情報提供を行った。厚生労働省が考える 2025 年の姿では基本的な考え方として、

〈高度急性期 18 万床＋一般急性期 35 万床〉：機能の明確化と機能に合わせた評価
- ・平均在院日数の短縮
- ・長期入院患者の評価の適正化
- ・重症度・看護必要度の見直し
- ・入院早期からのリハビリの推進　　など

〈回復期（亜急性期 26 万床）〉：急性期を脱した患者の受け皿となる病床の整備
- ・急性期からの受け入れ、在宅・生活復帰支援、在宅患者急変時受け入れ
- ・機能明確化した上で評価　　など

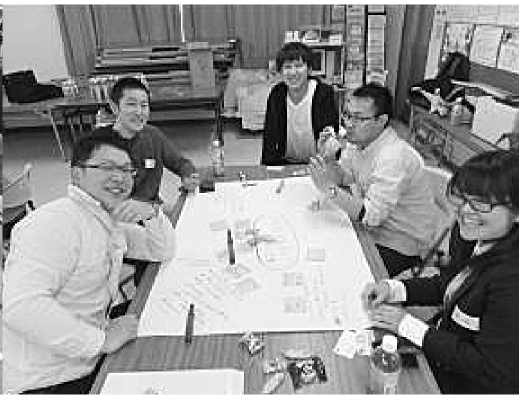
〈長期療養 28 万床〉：長期療養患者の受け皿の確保

〈その他、地域密着病床 24 万床〉
- ・医療資源の少ない地域の実情に配慮した評価
- ・有床診療所の機能に応じた評価

としており、埼玉県内の地域毎の人口変動をもとに、各施設がどのような機能を持っているか考えながら組織運営をする必要がある。我々診療放射線技師もこれらを理解し、今後の医療界で何ができるか、何をすべきかを考えなくてはならない。

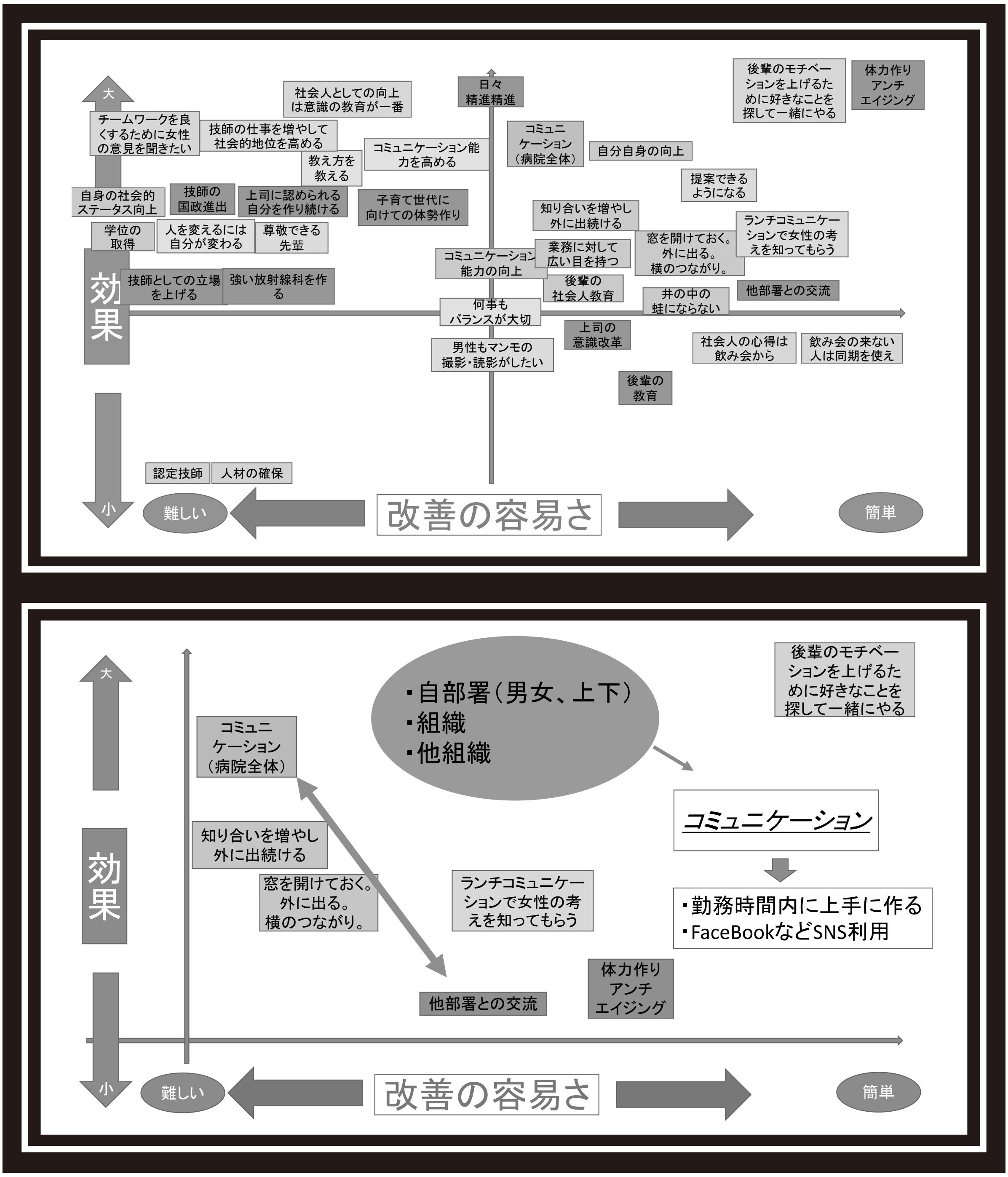
ワールドカフェ方式の討論会では25名の参加者を6テーブルに分け討論をしていただいた。最初は緊張と不安感から表情も硬く、会話も進まなかったが時間が経つに連れ、テーマとは異なる脱線した話も多く聞こえた。しかし、それこそがワールドカフェ方式の醍醐味であり、脱線した話ができるくらいリラックスした雰囲気でセミナーが進行したことを大変うれしく思う。

初めは体を引いて話をしていたが、時間とともに距離が近づいている。



最後に各テーブルで出た意見を集約し、総合討論とした

意見を以下にまとめる。



今回は問題点の抽出を主体としたが、次回以降は問題解決まで話を進められればと考えている。

平成26年度も開催予定であり、今回の参加者および少しでも興味を持った方は是非ご参加いただきたいと思う。

なお、Freedセミナー後に開催される裏Freedセミナーへのご参加も併せてお願いしたい。